

山村の集い

—ウィットゲンシュタイン・シンポジウム 2—

井原 奉 明

15分ほど待った。この間、焦る気持ちからすれば一刻も早く来て欲しいような、かといって先行き不安な気持ちからみればそんなに早く来なくてよいような、何とも言えない複雑な気持ちであった。そこに外見は普通の自家用車で、屋根やボディにタクシーであることを示す目印など何もない一台の車がやって来た。この風情は近所の人か？運転している人はサングラスをかけ、かなりラフな格好をしたおじさん（失礼!?）である。その車が駅のロータリーをぐるりと一巡りし、私から少し離れた場所で停まった時、それが自分を迎えに来たタクシーだと正直思わなかった。いや、正確に言えば、「ひょっとしたら」という気持ちが一瞬心を過ぎたことは否めない。だって、四半時間、駅前には一台の車も来なかったのだから。けれども、見た感じ、私の知識におけるタクシーという範疇には入らなかったし、一見強面の運転手さんに若干動揺したこともあって、迎車のタクシーだと思いたくなかったのである。

その車から降りた運転手さんは“Wittgenstein?”とこちらに向かって大声で呼びかけてきた。ん？頭が光速フル回転する。先のタクシー会社と私との会話。あまり共有部分を持たない対話者間で、理解困難なメッセージを推測で埋め合わせ、論理の飛躍した部分を推理でつなぎ合わせて、なんとかパズルを完成させようとした、判じ絵を解くようなコミュニケーション。それでもまだミッシングピースは多々あり、その結果、きつと数多くの誤解が積み重ねられたのだろう。何はともあれ、その車が私を迎えに来たタクシーであることに間違いないと観念した。

タクシーに近づく。気が乗らない。義務感を振り絞って気持ちを前向きにしようと努める。自分で呼んだタクシーだ、乗らないことはあり得ない、乗らなきゃいけないに決まってるじゃないか。でも気が重い。キルヒベルクまでの所要時間や料金よりも何よりも、今このタクシーに乗るこ

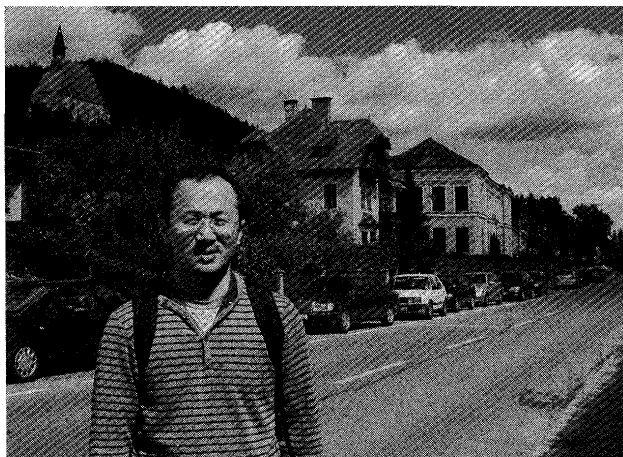
とに気が進まない。タクシーの運転手さんがきちんとした身なりをしているのは日本基準であって、海外へ出れば様々な様式があるので、そんなことを気にしているのではない。サングラスの彼は、こちらが挨拶しても、行き先を告げても、ドイツ語で言っても英語で話しかけても、仏頂面で押し黙り、こっちを睨んだままだった（サングラス越しなので本当は視線など見えるはずもないのだが、きつと睨んでいるのだろうと思った）ので、気が進まないのである。

とにかく、開き直ってタクシーに乗った（開き直らないとタクシーに乗れないという状況にもなかなか遭遇しないだろう）。車内は、やはりどう見ても自家用車である。タクシーといえばすぐに思いつく物、たとえばメーターなどないし、運転席と後部座席を区切るプラスチック板など影も形もない。助手席にはシューズやスポーツ用具がぞんざいに置かれている。商用の匂いのしない、あまりに日常的生活臭漂う雰囲気、少し呑まれた。

こちらが行き先など告げなくてもタクシーは発車した。それから、ほんのわずかな時間、街中を走り抜けた。あ、グrogニツって、こっち側は多少開けてるんだ、と気づいたが、そんな事実もあまり慰めにはならない。沈黙の気まずさにただ車窓を眺め、「キルヒベルク方面」とか「キルヒベルクまで何km」という道路標識がないか、道路脇や上方の看板の類をすべて目で追った。

タクシーは街中の道路から山へ登る道へと進路を変えた。その時、「キルヒベルク」という文字が目飛び込んできた。あ、よかった、少なくとも道は間違えてないし、行き先は合っている！

山へ登っていく道は綺麗に舗装された道路で、道幅も結構広い。少し走った所でカーブを曲がり終えたら急に視界が開け、絶景が眼前に拡がった。ウィーンの南の大地が遠くまで一望できる。その見晴らしは得も言われぬ美しさ、



キルヒベルクのメインストリート
駐車は学会関係者の車。

予想外の眼福を得る。行く手の山の中腹、いや少し上方には古城が聳え立っている。絶景に息を飲み、「おお」と思わず歎声が出た。と、その時、“Beautiful?”という声。えっ、英語？ 紛れもなくそれは英語であり、私の様子をルームミラー越しに覗いていた運転手さんの口から発せられたものだった。

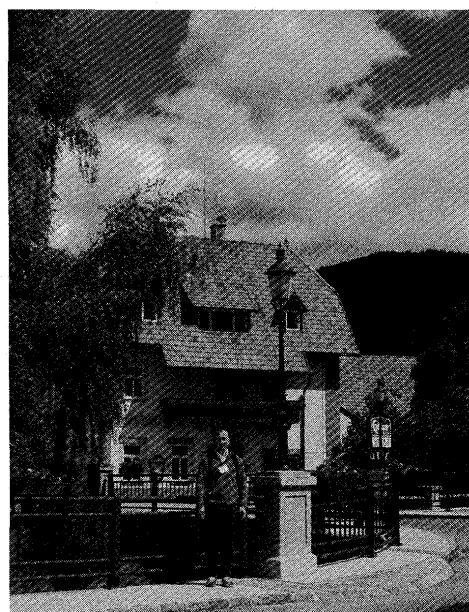
そう、運転手さんは英語が話せたのであった。アクセントや発音に若干癖はあるものの、コミュニケーションに支障をきたすほどではなかった。車に乗る前に私が話しかけた言葉に反応がなかったのは、単に聞こえなかっただけらしい。こちらが大きい声で明瞭に話すと、適切な答えを返してくれた。なんだ、そうだったのか。安堵した途端、一気に力が抜けた。

若いうちの苦労は買ってでもしろとよく言うが（事実その通りだと思うが）、取り越し苦労はあまり生産的でない。旅先で要領を得ない時、事に当たって熟考しておくことは必要だけど、気に病むぐらいなら、当たって砕けろの精神でとにかく体当たりしてしまう方が良い（生命の危険がなければ、という条件付きではあるが）。失敗したってそれもまた良い経験となる。

こんな教訓を語れるのも実体験があるからである。キルヒベルクまでの移動に際し、結論から言えば、私の不安はまったくの杞憂であった。いったん会話が始まってから、運転手さんはキルヒベルク方面の観光案内をドイツ語と英語とを交ぜながら訥々とし続けてくれた。歴史、地理、動植物、人々の生活、彼の披露する知識に所々怪しげなとこ

ろはあったが、それもまた一種の話術、エンターテインメントとして楽しめた。運転手さんも、こちらの緊張した、構えた態度が次第に溶けて行く様子に安心し、話に興が乗ったのだろう。彼が繰り出す冗談に、時に驚き、時に騙され、楽しく笑い、不信は去り、共感が深まっていった。彼の話には、人の良さが溢れていた。タクシー会社から英語ができるということで指名を受けたこと、その連絡を受けて慌てて出てきたから車内も片づけずに来てしまったこと、おもてなしの心で楽しませたくて何を話すか色々と考え、自信のない英単語を思い出そうと記憶を辿っていたこと、君（つまり私）が恐そうに見えたこと等々。何だ、お互い様じゃないか！

結局、キルヒベルクまで所要時間は1時間弱、料金は25ユーロであった。料金は最後まで訊かなかったけれど、高くふっかけられる心配は（降車時には）無用だった。そもそも、この辺りでは出発地と目的地に従って定額料金が決まっており、メーターなど使わないのだ。走行距離や所要時間、車中から眺めた抜群の景色、愉快的コミュニケーション、運転手さんとの触れ合い、すべてを合わせて25ユーロしかかからないとは！ 心許ないドイツ語を話す異邦人に対するオーストリアの人々の親切心。タクシー会社の方々、運転手さんの人情の機微に触れ得た喜びは格別であった。



郵便局前にあるホテル・ポスト
日本で言う民宿のようなもの。



教区オフィス お花を飾り、美しい。

さて、キルヒベルクである。ここに至るまでの間、小さな集落をいくつか通り過ぎてきたが、キルヒベルクもそんな集落の一つに過ぎない。人口は3000人程度。メインストリートは一本。その道が「中央通」と呼ばれ、家やホテル、レストラン、商店、学校が道沿いに並ぶ。端から端まで歩くのに20分もあれば十分の、小さな町である。

キルヒベルクとは「教会の丘」のこと。この音の響きを聞いた時、日本語の「教会」と「境界」とが連想でつながり、「境界の丘」というイメージが喚起された。境界は、この世と異界とを接ぐ処。境界の向こうにあるのは、桃源郷か冥府の闇か。「キョウカイ」という音鎖の中で響く「K」音は、「境（サカイ）」の中でも「界（カイ）」の中でも鳴り響き、私の言語深層意識において音と意味とが融通無碍に戯れる。

日本語では境界の向こう側を「か（彼）」で表現するように思われる。一人称・二人称・三人称それぞれの許を表わす「こ/そ/あ」に、疑問詞を作る辞として働く「ど」を足した「こそあど」の体系は境界内部の指示区分であるが、それに加えて、境界の外部・向こう側を「か」と表わす。たとえば、「こなた/そなた/あなた」が、人称の近接に基づいて境界内における方向性・場所性を表わすのに対し、「かなた（彼方）」は境界を超えた領域、境界の向こう側を示す。「これ/それ/あれ」に対する「かれ（彼）」は、

「われわれ」を析出する境界線の外部にある物を、「われわれ」で括れない存在物を指示する。「ここ/そこ」に対する「かこ（過去）」は、空間を表現する用法が時間へと転用されて、決して到達できない、境界外の時点を示す。境界の内部が自在に往還できる領域であるのに対し、境界の外部は、決して行くことができない処（過去）であったり、往くことはできるが還ることはできない、つまり生命と交換しない限り行き着くことができない処（彼岸）であったりする。境界はその内と外を分かち、両者に決定的な違いを創り出している。超えられない線。あるいは超えてはならない線。異界と現世との間に引かれた一線、それが境界なのである。

西欧の「かなた（彼方）」は、ユートピアや神の王国、または冥府として概念化された時、時間の延長線上に、つまり未来に位置づけられた。キリスト教でもノバ・アトランティスでも、異界は「時間軸上の境界（たとえば終末）」を超えたかなた（彼方）」に「いつか」到来するものと考えられたのである。一方、東洋では、「かなた（彼方）」は空間的な概念として把握される。空間の奥、裏側、向こう側に「かなた（彼方）」を見る。限りなく遠くにあったり、扉を開けたら拡がっていて知らぬ間に迷い込んだり…。桃源郷も、夢見ている間にどこか別の場所に連れて行かれ、境界（洞窟）を通して向こう側に出ると、一面に桃の花が咲いた綺麗な理想郷があった、という考え方である。東洋において境界は空間的な差異であり、そうして生み出された異界は「どこか」に在るものなのである（浦島太郎のような物語では、境界が海であり、異界である龍宮城が海底に潜む空間に位置づけられているだけでなく、異界から生還できる代償として時間の歪みを犠牲にせざるを得ないという結末になっており、「かなた（彼方）」は時空間の向こう側に設定されている）。

「K」音で始まり「K」音で終わる「キルヒベルク」は、現（うつ）と空（うつ）との間（あわい）に生じた町なのかもしれない。それほどキルヒベルクは閑静な町であった。キルヒベルクには、夏の間、オーストリアのみならず、ヨーロッパや遠くアジア（日本も）からスポーツ合宿の集団が訪れると聞くと、学会期間はそのような人々がいる気配はなく、町全体がひっそりと静まり返っていた。子供たちの姿を見るでもなく、喚声が聞こえるでもなく、地元住民にはあまり出会わなかった。バカンスシーズンなのか、営

業中の店も多くないし、役所や郵便局なども閑散としていた。

学会が開かれるのは小学校である。小学校といっても、外観は日本とかなり違う。日本の学校なら、正門があって校庭があってその向こうに横長の校舎があり、校庭の一角にプールや体育館があって、といったところだろうが、この小学校の建物は校舎っぽくない（あくまでも主観的なイメージに拠る）し、正門もなければ塀もない。校庭すら、一見どこにあるかわからない。

さて、小学校前でタクシーを降り、代金を支払って、運転手さんにお礼と別れを告げた。校舎の屋上から、学会の大きな垂れ幕が下がっている。「いよいよ来たなぁ」と、記念写真を撮る。それから校舎の外玄関を開け、中に入る。玄関には叩きがあり、そこから短い階段に至る右側の壁にこの地域の歴史が絵年表になって描かれている。左側には地理上の説明パネルが飾られている。数段の階段を上りきって内玄関の戸を開けると、廊下が左右に延びていた。校舎は上から見ると凹型で、小玄関のほぼ正面に二階へ上る階段がある。教室は廊下の右手側にも左手側にもあり、左手側の廊下を伝って奥へ行くと別棟の体育館へ通じる。

小玄関から中に入った所、階段の脇で、学会の過去の梗概集や学会関係者の新刊研究書、絵葉書などを販売してい



小学校の外玄関前で
校舎が大きすぎて写真に収まらない。



小学校の内玄関前で 階段が向こうに見える。

た。売り場アルバイトの学生に顔見知りがいなかったので目配せをするだけに止め、廊下を右手側に進み、一つ目の教室に入った。ここが事務局である。学会への参加登録をするのもここだ。この教室は低学年の児童が利用しているのか、机や椅子がやたらと小さい。子供用の椅子に学会事務局の面々やお手伝いの院生達が腰かけ、小さな机に向かっているのは何とも言えないミスマッチであり、微笑ましい。ここで自分の名前を名乗り、プログラム、名札、資料等を受領してから、旧知の面々に挨拶する。この年のシンポジウムは「時間と歴史」というテーマで、私にうってつけであった。この学会の中には、意見を同じくする者もいれば論敵もいる。けれども、研究者同士は仲間意識が高く、普段は仲が良いし連帯感も強い。「今回は何を発表するの?」「〇〇読んだ?」「××氏がこんな発表するらしいよ」等々、情報交換しながら旧交を温めた。と、そこへ件のタクシー運転手が入ってきた。どうやら私の話に関心を持ち、地元の有名人ウィトゲンシュタインに惹かれたらしい（彼はキルヒベルクの住民ではなく、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインを知らなかったし、この近辺が所縁の場所だとも知らなかった）。彼はプログラムを手にとって、興味深そうに眺めている。タイムテーブルを見ながら「君はいつ発表するの?」と尋ねられた。ヤヤヤ、来る気なのか?

実はこのような経験は珍しくない。以前海外で学会発表をした時にも似たようなことがあった。海外では、専門家とそれ以外の人との間に（変な意味での）差別がなく、両者を隔てる壁は低い。学会は誰に対しても開かれ、誰もが

ウェルカムの姿勢で迎えられ、平等に権利を持って参加できるものだと考えられている。この点、日本の学会は閉鎖的・排他的・内向き過ぎるのではないか。学会は本来様々な考え方の人達が広く交流すべき場であるべきなのに、現実には敷居が高く、一般人はなかなか聞きに行けない（ましてや発表どころではない）。こういった不満は一般企業人からもよく耳にする。彼らも、興味深いテーマであれば話を聞いてみたい、自分の考えをぶつけて議論してみたい、と思っているのに。まったく残念であり、おかしいと思う。私は、自らの哲学的論考にはリアリティがなければならないと信じている。哲学には、筋道立った論理に基づく説得力と、現実に生きる人達の実感にマッチしたリアリティが必要だ。もちろん、リアリティがあれば十分だという訳ではないが、現実に生きる人々が納得できるような実感を伴うよう、考察をよく練り上げていくことこそが、真理への王道であると私は信じる。だから、自分の考えは、専門家だけでなく一般の人々によく聞いて（読んで）もらうよう常々心がけているし、「確かにそうだなあ」というリアリティを誰もが感じられるよう、自らの思想を磨き上げている。

運転手さんに私の発表予定日時を教え、「ダンケ」と仕草で伝えた。彼はサングラス越しにウインクをし、OKサインを示した。これで約束完了だ。事務局で、「自分が聞

きたい発表の日の分だけ費用を納め、当日会員になることができるのか」と尋ねている。それを見て、いいなあと思う。

続いて、臨時書店（書店の出張販売所、出店）を冷やかす。学会会期中、一教室を借り切って、主に学会テーマに関する学術書を販売する簡易書店である。ここを訪ねるのも学会へ行く楽しみのひとつだ。元々、私は本も書店も大好きなのだが、学会期間中の臨時書店は一層魅力的である。通常、どれだけ大きな書店に行っても、自分の関心ある分野の本がこれほど揃っていることはないからだ。新刊書、稀覯本、手に入りにくくなった本、見たこともない本等々、眼前に並べられた宝物を昂揚した気分で端から眺めて行くのは至福の時である。

店番のおじさんは、ゆるい感じで座っていた。（続く）

（いはら ともあき 英語コミュニケーション学科）



町の観光の目玉は、やはりウィットゲンシュタイン